21　新海竹太郎　鐘ノ歌

大正十三年（一九二四）　木彫　二一・六×二七・七×四七・〇　一点

鋳物師が、溶けた金属の入った坩堝（るつぼ）を炉から引き上げようとする姿を彫り表す。鑿跡を残し大まかに形をとらえた表現により、動きある量感にあふれた作品に仕上げられている。ハウプトマンの戯曲「沈鐘」を題材としたとの伝来があるが、作品の前面に刻まれているドイツ語は、シラーの詩「鐘の歌」の一節と一致している。「鐘の歌」は、職人たちが鐘を造り上げていく工程を眺めながら、詩人が人生について、青春や結婚、家庭、社会について思いを巡らせていくという内容である。本作に刻まれた部分は、鐘の地金のために金属を溶かして合金を造る場面にあわせて、結婚についてうたわれた一節「なぜなら、硬いものと軟らかいもの、強いものと優しいものとがつがうときに、よい響きは生まれる。」（内藤克彦『シラー』人と思想41）である。本作は、大正十三年の皇太子（昭和天皇）御成婚に際して貴族院より皇太子に献上された品で、この御成婚によせて作者の新海竹太郎（一八六八～一九二七）が、自らの制作活動のなかで長く関わった、身近な鋳物師を題材とし、シラーの詩に祝意を重ねて制作したと考えられる。新海の造形が自由な拡がりを持っていたことを示す一点である。

新海は山形に生まれ、明治十九年に軍人を志して上京、後に後藤貞行に師事し、小倉惣次郎に塑造を学んだ。明治三十三年に渡欧しパリを経て、ベルリンでアカデミックな彫刻技法を学んで大きな成果を得た。帰国後は太平洋画会の彫刻部を主宰し、多くの後進を育てた。明治四十年第一回文展は審査員をつとめ、代表作「ゆあみ」を出品。その後は木彫、塑像と両方を手がけながら様々な題材を取り上げ、表現の可能性を探る幅広い制作活動を展開した。大正六年には帝室技芸員に、同八年には帝国美術院会員となった。

DENN WO DAS STRENGE MIT DEM ZARTEN
WO STARKES SICH UND MILDES PAARTEN
DA GIEBT ES EINEN GUTEN KLANG

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花ひらく個性、作家の時代―大正・昭和初期の美術工芸
三の丸尚蔵館展覧会図録No.50

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年三月三十日発行

© 2010, The Museum of the Imperial Collections